日蓮大聖人御書全集

秋元御書

あきもとごしょ

新版
1457
〜
1467

秋元御書

弘安3年('80) 1月27日　59歳　秋元太郎

筒御器一具付けたり三十、ならびに盞付けたり六十、送り給び候い畢わんぬ。

御器と申すは、うつわものと読み候。

大地くぼければ水たまる。青天浄ければ月澄めり。月出でぬれば水浄し。雨降れば草木昌えたり。器は大地のくぼきがごとし。水たまるは池に水の入るがごとし。月の影を浮かぶるは法華経の我らが身に入らせ給うがごとし。

器に四つの失あり。一には覆と申して、うつぶけるなり、またはくつがえす、または蓋をおおうなり。二には漏と申して、水もるなり。三には汚と申して、けがれたるなり。水浄けれども、糞の入りたる器の水をば用いることなし。四には雑なり。飯に、あるいは糞、あるいは石、あるいは沙、あるいは土なんどを雑えぬれば、人食らうことなし。

器は我らが身心を表す。我らが心は器のごとし。口も器、耳も器なり。法華経と申すは仏の智慧の法水を我らが心に入れぬれば、あるいは打ち返し、あるいは耳に聞か

じと左右の手を二つの耳に覆い、あるいは口に唱えじと吐き出だしぬ。譬えば、器を覆するがごとし。

あるいは少し信ずるようなれども、また悪縁に値って信心うすくなり、あるいは打ち捨て、あるいは信ずる日はあれども捨つる月もあり。これは水の漏るるがごとし。

あるいは法華経を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華経、一口は南無阿弥陀仏なんど申すは、飯に糞を雑え、沙・石を入れたるがごとし。法華経の文に「ただ楽って大乗経典を受持するのみにして、乃至、余経の一偈をも受けざれ」等

と説くはこれなり。世間の学匠は法華経に余行を雑えても苦しからずと思えり。日蓮もさこそ思い候えども、経文はしからず。譬えば、后の大王の種子を妊めるが、また民とつげば、王種と民種と雑じって天の加護と氏神の守護とに捨てられ、その国破るる縁となる。父二人出で来れば、王にもあらず、民にもあらず、人非人なり。

法華経の大事と申すはこれなり。種・熟・脱の法門、法華経の肝心なり。三世十方の仏は、必ず妙法蓮華経の五字を種として仏に成り給えり。南無阿弥陀仏は仏種には

あらず。真言・五戒等も種ならず。能く能くこのことを習い給うべし。これは雑なり。

この覆・漏・汚・雑の四つの失を離れて候器をば完器と申して、まったき器なり。塹つつみ漏らざれば、水失することなし。信心のこころ全ければ、平等大慧の智水乾くことなし。

今この筒の御器は、固く厚く候上、漆浄く候えば、法華経の御信力の堅固なることを顕し給うか。

毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて、四天下第一の福天

と云われ給う。浄徳夫人は雲雷音王仏に八万四千の鉢を供養し進らせて、妙音菩薩と成り給う。今、法華経に筒御器三十・盞六十進らせて、いかでか仏に成らせ給わざるべき。

そもそも、日本国と申すは十の名あり。扶桑・野馬台・水穂・秋津洲等なり。別しては六十六箇国・島二つ。長さ三千余里。広さは不定なり、あるいは百里、あるいは五百里等。五畿七道、郡は五百八十六、郷は三千七百二十九、田の代は上田一万一千一百二十町、乃至八十八万五千五百

六十七町。人数は四十九億八万九千六百五十八人なり。神社は三千一百三十二社、寺は一万一千三十七所、男は十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千八百三十人なり。その男の中に、ただ日蓮、第一の者なり。何事の第一とならば、男女に悪まれたる第一の者なり。

その故は、日本国に国多く人多しといえども、その心一同に南無阿弥陀仏を口ずさみとす。阿弥陀仏を本尊とし、九方を嫌って西方を願う。たとい法華経を行ずる人も、真言を行う人も、戒を持つ者も、智者も、愚人も、余行を

傍として念仏を正とし、罪を消さん謀は名号なり。故に、あるいは六万・八万・四十八万返、あるいは十返・百返・千返なり。

しかるを、日蓮一人「阿弥陀仏は無間の業、禅宗は天魔の所為、真言は亡国の悪法、律宗・持斎等は国賊なり」と申す故に、上一人より下万民に至るまで、父母の敵、宿世の敵、謀叛・夜討ち・強盗よりも、あるいは畏れ、あるいは瞋り、あるいは詈り、あるいは打つ。これを訾る者には所領を与え、これを讃むる者をばその内を出だし、あるい

は過料を引かせ、殺害したる者をば褒美なんどせらるる上、両度まで御勘気を蒙れり。

当世第一の不思議の者たるのみならず、人王九十代、仏法渡っては七百余年なれども、かかる不思議の者なし。

日蓮は文永の大彗星のごとし、日本国に昔より無き天変なり。日蓮は正嘉の大地震のごとし、秋津洲に始めての地夭なり。

日本国に代始まってよりすでに謀叛の者二十六人。第一は大山王子、第二は大石山丸、乃至、第二十五人は頼朝、

第二十六人は義時なり。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝す。二人は王位を傾け奉り、国中を手に拳る。王法既に尽きぬ。これらの人々も、日蓮が万人に悪まるるには過ぎず。

その由を尋ぬれば、法華経には「最も第一なり」の文あり。しかるを、弘法大師は「法華は最も第三なり」、慈覚大師は「法華は最も第二なり」、智証大師は慈覚のごとし。今、叡山・東寺・園城寺の諸僧、法華経に向かっては「法華は最も第一なり」と読めども、その義をば「第二」「第三」と読む

なり。公家と武家とは子細は知ろしめさねども、御帰依の高僧等皆この義なれば、師檀一同の義なり。その外、禅宗は「教外に別伝す」云々。法華経を蔑如する言なり。念仏宗は「千の中に一りも無し」「いまだ一人も得る者有らず」と申す。心は法華経を念仏に対して挙げて失う義なり。律宗は小乗なり。正法の時すら仏免し給うことなし。いわんや、末法にこれを行じて国主を誑惑し奉るをや。妲己・妹喜・褒姒の三女が三王を誑かして代を失いしがごとし。かかる悪法国に流布して法華経を失う故に、

安徳・尊成等の大王、天照太神・正八幡に捨てられ給いて、あるいは海に沈み、あるいは島に放たれ給い、相伝の所従等に傾けられ給いしは、天に捨てられさせ給う故ぞかし。

法華経の御敵を御帰依有りしかども、これを知る人なければ、その失を知ることもなし。「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」とは、これなり。

日蓮は智人にあらざれども、蛇は竜の心を知り、烏の世の吉凶を計るがごとし。このことばかりを勘え得て

候 なり。このことを申すならば、須臾に失に当たるべし。申さずんば、また大阿鼻地獄に堕つべし。

法華経を習うには三つの義あり。一には謗人。勝意比丘・苦岸比丘・無垢論師・大慢婆羅門等がごとし。彼らは三衣を身に纏い、一鉢を眼に当て、二百五十戒を堅く持って、しかも大乗の讐敵と成って無間大城に堕ちにき。今の日本国の弘法・慈覚・智証等は、持戒は彼らがごとく、智慧はまた彼の比丘に異ならず。ただし、「大日経真言第一、法華経第二・第三」と申すこと、百千に一つも日蓮が申す

ようならば、無間大城にやおわすらん。このことは申すも恐れあり。まして書き付くるまではいかんと思い候えども、「法華経は最も第一なり」と説かれて候に、これを「二」「三」等と読まん人を聞いて、人を恐れ国を恐れて申さずんば、「即ちこれ彼が怨なり」と申して、一切衆生の大怨敵なるべき由、経と釈とにのせられて候えば、申し候なり。人を恐れず、代を憚らず云うこと、「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」と申すはこれなり。

不軽菩薩の悪口・杖石も他事にあらず。世間を恐れざ

るにあらず。ただ法華経の責めの苦ろなればなり。例せば、祐成・時致が大将殿の陣の内を簡ばざりしは、敵の恋しく恥の悲しかりし故ぞかし。これは謗人なり。

謗家と申すは、すべて一期の間法華経を謗ぜず昼夜十二時に行ずれども、謗家に生まれぬれば必ず無間地獄に堕つ。例せば、勝意比丘・苦岸比丘の家に生まれて、あるいは弟子と成り、あるいは檀那と成りし者どもが、心ならず無間地獄に堕ちたる、これなり。

譬えば、義盛が方の者、軍をせし者はさて置きぬ、腹の

内に有りし子も、産むを待たれず母の腹を裂かれしがごとし。今、日蓮が申す弘法・慈覚・智証の三大師の、法華経を正しく「無明の辺域、虚妄の法」と書かれて候は、もし法華経の文実ならば、叡山・東寺・園城寺・七大寺、日本一万一千三十七所の寺々の僧はいかんが候わんずらん。先例のごとくならば、無間大城疑いなし。これは謗家なり。

謗国と申すは、謗法の者その国に住すれば、その一国皆無間大城になるなり。大海へは一切の水集まり、その国は

一切の禍い集まる。

譬えば、山に草木の滋きがごとし。三災月々に重なり、七難日々に来る。飢渇発れば、その国餓鬼道と変じ、疫病重なれば、その国地獄道となる。軍起これば、その国修羅道と変ず。父母・兄弟・姉妹をば簡ばず妻とし夫と憑めば、その国畜生道となる。死して三悪道に堕つるにはあらず、現身にその国四悪道と変ずるなり。これを謗国と申す。

例せば、大荘厳仏の末法、師子音王仏の濁世の人々のごとし。また報恩経に説かれて候がごとくんば、過去せる

父母・兄弟・姉妹・一切の人の死せるを食し、また生きたるを食す。今、日本国またまたかくのごとし。真言師・禅宗・持斎等の、人を食する者、国中に充満せり。これひとえに真言の邪法より事起これり。竜象房が人を食らいしは万が一つ顕れたるなり。彼に習って人の肉を、あるいは猪鹿に交え、あるいは魚鳥に切り雑え、あるいはたたき加え、あるいはすしとして売る。食する者数を知らず。皆、天に捨てられ、守護の善神に放されたるが故なり。結句は、この国他国より責められ、自国どし打ちして、この国変じ

て無間地獄と成るべし。

日蓮、この大いなる失を兼ねて見し故に、与同罪の失を脱れんがため、仏の呵責を思うが故に、知恩・報恩のため、国の恩を報ぜんと思って、国主ならびに一切衆生に告げ知らしめしなり。

不殺生戒と申すは一切の諸戒の中の第一なり。五戒の初めにも不殺生戒、八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網の十重禁戒・華厳の十無尽戒・瓔珞経の十戒等の初めには皆、不殺生戒なり。儒家の三千の禁めの中にも大辟こそ

第一にて候え。その故は「三千界に遍満するも、身命に直するもの有ることなし」と申して、三千世界に満つる珍宝なれども、命に替わることはなし。蟻子を殺す者なお地獄に堕つ。いわんや魚鳥等をや。青草を切る者なお地獄に堕つ。いわんや死骸を切る者をや。かくのごとき重戒なれども、法華経の敵に成れば、これを害するは第一の功徳と説き給うなり。いわんや、供養を展ぶべけんや。

故に、仙予国王は五百人の法師を殺し、覚徳比丘は無量の謗法の者を殺し、阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき。

これらの国王・比丘等は、閻浮第一の賢王、持戒第一の智者なり。仙予国王は釈迦仏、覚徳比丘は迦葉仏、阿育大王は得道の仁なり。今、日本国もまたかくのごとし。持戒・破戒・無戒、王臣・万民を論ぜず、一同の法華経誹謗の国なり。たとい身の皮をはぎて法華経を書き奉り、肉を積んで供養し給うとも、必ず国も滅び、身も地獄に堕ち給うべき大いなる科あり。ただ真言宗・念仏宗・禅宗・持斎等の身を禁めて法華経によせよ。

天台の六十巻を空に浮かべて国主等には智人と思われた

る人々の、あるいは智の及ばざるか、あるいは知れども世を恐るるかの故に、あるいは真言宗をほめ、あるいは念仏・禅・律等に同ずれば、彼らが大科には百千超えて候。例せば、成良・義村等がごとし。慈恩大師は玄賛十巻を造って、法華経を讃めて地獄に堕つ。この人は太宗皇帝の御師、玄奘三蔵の上足、十一面観音の後身と申すぞかし。音は法華経に似たれども、心は爾前の経に同ずる故なり。嘉祥大師は法華玄十巻を造って、既に無間地獄に堕つべかりしが、法華経を読むことを打ち捨てて天台大師に仕えしかば、

地獄の苦を脱れ給いき。

今、法華宗の人々もまたかくのごとし。比叡山は法華経の御住所、日本国は一乗の御所領なり。しかるを、慈覚大師は法華経の座主を奪い取って真言の座主となし、三千の大衆もまたその所従と成りぬ。弘法大師は法華宗の檀那にて御坐します嵯峨天皇を奪い取って、内裏を真言宗の寺と成せり。安徳天皇は明雲座主を師として頼朝朝臣を調伏せさせ給いしほどに、右大将殿に罰せらるるのみならず、安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺され給いき。尊成王は、

天台座主の慈円僧正、東寺、御室ならびに四十一人の高僧等を請下し奉り、内裏に大壇を立てて義時右京権大夫殿を調伏せしほどに、七日と申せし六月十四日に洛陽破れて、王は隠岐国あるいは佐渡島に遷され、座主・御室は、あるいは責められ、あるいは思い死にに死に給いき。世間の人々、この根源を知ることなし。これひとえに法華経・大日経の勝劣に迷える故なり。

今もまた、日本国、大蒙古国の責めを得て、彼の不吉の法をもって御調伏を行わると承る。また日記分明なり。

このことを知らん人、いかでか歎かざるべき。

悲しいかな、我ら誹謗正法の国に生まれて大苦に値わんことよ。たとい謗身は脱るというとも、謗家・謗国の失いかんせん。謗家の失を脱れんと思わば、父母・兄弟等にこのことを語り申せ。あるいは悪まるるか、あるいは信ぜさせまいらするか。謗国の失を脱れんと思わば、国主を諫暁し奉って、死罪か流罪かに行わるべきなり。「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」と説かれ、「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」と釈せられしは、これな

り。

過去遠々劫より今に仏に成らざりけることは、かようのことに恐れて云い出ださざりける故なり。未来もまたまたかくのごとくなるべし。今、日蓮が身に当たってつみ知られて候。たといこのことを知る弟子等の中にも、当世の責めのおそろしさと申し、露の身の消え難きによって、あるいは落ち、あるいは心ばかりは信じ、あるいはとこうす。御経の文に「難信難解」と説かれて候が、身に当たって貴く覚え候ぞ。謗ずる人は大地微塵のごとし。信ずる人

は爪上の土のごとし。謗ずる人は大海、進む人は一滴。

天台山に竜門と申す所あり。その滝百丈なり。春の始めに魚集まってこの滝へ登るに、百千に一つも登る魚は竜と成る。この滝の早きこと、矢にも過ぎ、電光にも過ぎたり。登りがたき上に、春の始めにこの滝に漁父集まって魚を取る。網を懸くること百千重、あるいは射て取り、あるいは酌んで取る。鷲・鵰・鴟・梟・虎・狼・犬・狐集まって昼夜に取り噉らうなり。十年二十年に一つも竜となる魚なし。

例せば、凡下の者の昇殿を望み、下女が后と成らんとするがごとし。法華経を信ずること、これにも過ぎて候と思しめせ。

常に仏禁めて言わく、いかなる持戒、智慧高く御坐しまして一切経ならびに法華経を進退せる人なりとも、法華経の敵を見て、責め罵り国主にも申さず、人を恐れて黙止するならば、必ず無間大城に堕つべし。譬えば、我は謀叛を発さねども、謀叛の者を知って国主にも申さねば、与同罪は彼の謀叛の者のごとし。南岳大師云わく「法華経の讐

を見て呵責せざる者は謗法の者なり。無間地獄の上に堕ちん」と。見て申さぬ大智者は、無間の底に堕ちて、彼の地獄の有らん限りは出ずべからず。

日蓮、この禁めを恐るる故に国中を責めて候ほどに、一度ならず流罪・死罪に及びぬ。今は罪も消え、過も脱れなんと思って、鎌倉を去ってこの山に入って七年なり。

この山の為体、日本国の中には七道あり。七道の内に東海道十五箇国、その内に甲州の飯野御牧の三箇郷の内、波木井と申すこの郷の内、戌亥の方に入って二十余里の深

山あり。北は身延山、南は鷹取山、西は七面山、東は天子山なり。板を四枚つい立てたるがごとし。この外を回って四つの河あり。北より南へ富士河、西より東へ早河、これは後ろなり。前に西より東へ波木井河の中に一つの滝あり。身延河と名づけたり。中天竺の鷲峰山をこの処へ移せるか、はたまた漢土の天台山の来れるかと覚ゆ。

この四山四河の中に手の広さ程の平らかなる処あり。ここに庵室を結んで天雨を脱れ、木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折って身を養い、秋は

果を拾って命を支え候いつるほどに、去年十一月より雪降り積んで、改まる年の正月、今に絶ゆることなし。庵室は七尺、雪は一丈、四壁は氷を壁とし、軒のつららは道場荘厳の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本より人も来らぬ上、雪深くして道塞がり、問う人もなき処なれば、現在に八寒地獄の業を身につぐのえり。生きながら仏には成らずして、また寒苦鳥と申す鳥にも相似たり。頭は剃ることなければ、うずらのごとし。衣は氷にとじられて、鴛鴦の羽を氷の結べるがごとし。

かかる処へは、古昵びし人も問わず、弟子等にも捨てられて候いつるに、この御器を給わって、雪を盛って飯と観じ、水を飲んでこんずと思う。志のゆくところ、思い遣らせ給え。またまた申すべく候。恐々謹言。

弘安三年正月二十七日　　日蓮　花押

秋元太郎兵衛殿御返事